

上神明 天祖神社社報

第180号 平成24年3月1日



社頭所感

天祖神社宮司 斎藤篤信

震災後の生き方(心を癒す)

東北から未来を学ぶ希望のメッセージ

日本は、天照大神を皇室の守り神として「古事記」の時代より崇められてまいりました。即ち太陽信仰です。

昨年の大震災は、天災であるとともに人災であり、それ以上に文明災だと言われます。日本人は昔から地、水、火、風を重んじて来ました。これは空海すなわち弘法大師の教えです。植物も動物もすべて太陽の力で支えられ生きてまいりました。即ち地熱発電、水力発電、火力発電、風力発電、こうした自然のエネルギーを供給することなのです。このエネルギーの問題は、科学技術と共存するものでなければなりません。

今、私達は自然の恐ろしさを知り傲慢の文明を反省して、自然の恩恵に感謝する文明、即ち日本人の素晴らしい文化と歴史に誇りを持って、先祖達が残した日本魂を大切に守らなければならないと思います。

他者を信じる美しい心を取り戻し、力強く生きて行きたいものと存じます。そして災害に遭った多くの人々に希望の光を少しでも与えたいと思います。

厳修裡に執り行われた初午祭

二月三日(十一時)当社 稲荷社の初午祭が執り行なわれました。

当日は晴天に恵まれ、大勢の参列者がご参列下さいました。

今年も直会終了後、西沢社中の皆様 井村明子様、平澤ゆり子様、柵木ヒサ様による抹茶(豆茶)の接待がございました。

大勢の子供達でにぎわった節分祭

二月三日 午後六時より節分祭の豆まきの行事が行われました。当日は大勢の子供達が参列下さいました。式典の中で今年より浦安の舞が奉奏され一同、玉串礼を行いました。

式典後は恒例の赤鬼、青鬼が現れ豆まきが、いともにぎやかに執り行われました。

建国記念祭 厳肅に斎行す

二月十一日(十一時)より建国記念祭を厳肅に斎行いたしました。

当日は職員一同参列し儀式の後、檀原神宮を遙拝し、君が代斉唱の後、紀元節を斉唱し、めでたく終了いたしました。

祈年祭 執行す

二月十七日 祈年祭「としごいのまつり」が職員一同参列のもと執り行われました。

今年も大神様のみ恵みをいただき、豊かな実りと万人の健康と生業の繁栄をお祈願申し上げます。

生命の言葉(三月)

つまづいたっていいじゃないか

にんげんなんだから

あいだみつを

人間は失敗する。その能力に限りがあるからである。また、人間は挫折する。夢やあこがれを抱く存在だからである。

失敗も挫折も、それが人間である証と思いきり越えていかななくてはいけない。

『にんげんなもの』

相田みつを(あいだみつを)

一九二四〜一九九一年 畫家、詩人

栃木県足利市出身、十代の頃から詩と書を読み、在家のまま仏法を修めながら自分だけの詩と書

を追求し独自の境地を切り開いた。人間の弱さや過ちを包み込んで元気づけるような心温まる作品を多く残している。

弁財天祭りのご案内

四月八日(日)十一時より弁財天の例祭が執り行われます。

当社の弁財天は、靈験あらたかな神様として広く崇敬され、参拝なされる方が遠方よりいらつしやいます。

当日は自由参拝です。式典後は甘酒の接待がござります。

平成二十三年度分 崇敬会費ご納入のお願い

三月早々平成二十三年度分天祖神社崇敬会費のご納入のお願いに参上いたします。

出費多端の折柄、誠に恐縮ではございますが、その節はよろしく、協力の程お願い申し上げます。訪問者は二葉四丁目在住の岡保幸様が神社事務員として伺います。宜しくお願いいたします。

月次祭

当社では毎月一日午前七時より、その月の氏子の皆様の家内安全を祈る月次祭を行っております。当日は御神前にて祭儀を厳修し参列者一同で「大祓詞」を奉唱し、次いで社務所にて「朝粥」を食し歓談いたします。

★二月一日に参列なさった方々のご芳名

矢羽直公様、金子省太郎様、柵木ヒサ様、井瀨良子様、高須みち子様、富田登美子様、吉川トミ様

平成二十四年歳旦祭（奉納者御芳名）

（敬称略・順不同）

〈金一封〉

大山 忠一	平林 茂	安西 政男
松井 清一	石川 幸子	佐藤 伸一
高橋 友一	昆 良子	山田 寿雄
草柳 洋一	高瀬 照男	土屋富美子
千葉 雅雄	本橋 武	山田 孝子
小宮 幸雄	野秋 清	原 昭夫
上村 和雄	平澤 真	川井工務店
根本 忠良	新井 賢治	小澤 邦彦
小林 政敏	阿部 林野	青木 雪子
櫻井 崇博	森谷 辰雄	平田 秀樹
温井 賢伸	塚田 正實	金子 恒治
井淵 良子	高橋由美子	吉田工務店
森谷 智行	湯浅 陽子	武藤 章
遠藤 正	内村 光子	今井 康雄
矢羽 直公	石橋 良一	鈴木 勝美
金子省太郎	佐野 信勝	上村 幸子
磯 昭夫	勝見 修子	望月 昭廣
蛭間 勲	勝見佐知子	海野 雅美
高須みちよ	栗田 恵造	栗原 功明
佐藤 武利	伊勢元酒店	清水 庄司
鈴木 吉和	谷川 寛	木下 晃一
川島 忠雄	西澤 完治	関根さな江
太田 明	富田登美子	太田 絹江
小池 博保	吉田 吉未	島田 一憲
武藤代志子	林 哲嗣	成尾美和子

〈御神酒〉

市原 勝祐	大橋 屋
川瀬 次夫	幸田與志郎
尾内 正行	石橋 良一
幸田與志郎	菅野ゆり子
笹本三樹雄	古舘 秀也
屋形 百松	佐藤 慶子
石毛 潔	望月美津穂
青柳 富子	
新堀 和哉	〈御神米〉
小宮 進	西沢 完治
東 亨	古舘 秀也

東日本大震災復興祈願祭齋行

来る三月十一日は、東日本大震災の発生より一年が経過します。然しながら、未曾有の大災害の影響は深刻であります。

つきましては、神社界一丸となり被災地の一日も早い復興と被災されたすべての人々に一日も早い平安が訪れる事を祈念いたしまして、当社では当日午前十時より儀式を執り行いたいと存じますので、皆様方には是非ご参列下さいますよう、お待ち申し上げます。

宮 司

神道は精神の故郷

現状突破の教え

甦り（よみがえり）

厳しい人生の試練に直面したとき、日本人は「裸になって出直す」「二から出直す」「生まれ変わって出直す」あるいは「死んだつもりでやってみる」「死ぬ気でやればできないことはない」など、さまざまな言葉で自分を励まし、現状を打開したり、再出発しようと努力します。

これは今までの自分を捨てて新しい自分となって再出発することでもあります。つまり、新しい生命を甦らせ、活力を得て人生をもう一度やり直すことでもあります。甦ることによって自分の魂や生命力は永遠に生きることになります。神様とともに人も自然も、あらゆるものが毎年新しく甦るのです。絶えざる甦りによって、その生命は永遠に維持されて行き、神祭り、年中行事、人生儀礼、二十年ごとに繰り返される伊勢神宮の遷宮祭も、永遠の生命を維持するための甦りのお祭りなのです。

「甦り思想」は、自然を大切にし、畏怖して生きてきた私たちの祖先が、草木が古い葉を落として新しい芽を吹くという自然の摂理、あるいはリズムを感得して誕生させた日本人のすばらしい生命観であるのです。

平成二十四年初午祭奉納者ご芳名

〈金一封〉

大山忠一 尾内正行
 草柳洋一 大野由美子
 高橋友一 越路
 金子恒治
 幸田與志郎
 成尾美和子
 鳥居啓子
 上村幸子
 武藤代志子
 井村明子
 平田秀樹
 温井賢伸
 遠藤正
 桜井崇博
 平澤ゆり子
 湯浅陽子
 海野雅美
 平澤晴雄
 井沢良子
 桜井卓
 佐藤武利
 小宮幸雄
 鈴木吉和
 菌部万亀雄
 内村光子
 青木雪子
 川瀬次夫
 本橋美智子
 島田一憲
 野秋清

(敬称略・順不同)

市川和子
 尾内正行
 大野由美子
 越路

〈御神米〉

今井精米店

〈御神酒〉

伊勢元酒店
 幸田與志郎
 菅野ゆり子
 佐藤慶子

〈玉子〉

金子恒治

〈御菓子〉

平田貴子
 鳥居啓子
 斎藤恭子
 斎藤朋子
 昆良子

おくる心 本当の贈り物

むかし人々のくらしをひたすら支えていたのは、つきあいという生活行動でした。自分や家族が生きていくためには、隣近所が仲間になって部落ぐるみで外敵や自然とたたかわねばなりません。そして豊穡を喜びあい、悲しみを慰めあつてくらしてきたのです。

庭に美しい花が咲いたら、そのひと枝を折り、和紙に包んで贈り、ご馳走をつくれれば隣近所に少しづつ「おすそわけ」する。かつて古い日本にあつたそんなおつきあいや心のふれあいの機会は、今一層必要なのではないでしょうか。

和紙に包んだひと枝の花やおすそわけ、これこそ本当の贈り物の原形と云えましょう。

贈りものは、人々の感謝の気持を品物やお金に替えて相手に伝えようとするものです。また相手の喜びを自分の喜びとし、相手の悲しみを自分の悲しみとする気持のあらわれでもあります。

このような「おくる心」は、むかしも今も私たちのくらしの中に生きつづけているのです。

駐車場空あります

能面二面の寄贈

氏子総代並豊六丁目町会長小宮幸雄様より、能面二面の寄贈がございました。小宮様の師匠 田島満春先生の作で、「小面」「孫次郎」の二つの作品です。

社務所に飾り大切に保管いたす所存です。

すべてが好転する

生きる習慣

東日本大震災の悲しみや原発事故に対する不安の現実のなかで生きる私達は、特に、高齢者の方々は今の仕事や人生に弱気となりストレスから逃げられず全てが消極的となり卑屈になりがちにくらしてあります。

そんなとき私達は、人生は最後まで修行と心得て、過去を振り返らず未来を見据えて明るく働いてまいりたいものです。その時、人は一層輝き人生の転機を迎えられるのではないのでしょうか。

人には、どんな人にも、一人ひとり最後まで貴重な働きがあるものなのです。

〒一四一〇〇四三

東京都品川区二葉四一四一十二

天祖神社々務所

TEL 〇三(三七八)一七一

FAX 〇三(三七八)一七一